

□ 書評 □

臨床免疫学叢書 5

「免疫学からみた肝臓疾患」

編集：畔柳武雄・大高裕一・松橋 直

東京女子医科大学消化器内科

竹 本 忠 良

学生にたいする消化器病学の講義は肝臓でも脾でも、かなり無理しても自分でやるようにしている。zu spät かもしれないが、ながい間のあまりにかたよりすぎた勉強のしかたを修正しようというつもりからである。最近では、求める本も消化管よりも肝臓関係の方が多いかもしれない。

この本「免疫学からみた肝臓疾患」も自分の貧弱な知識を補い、雑多な文献を読みあさって混線している現況を脱しようという意味で、とびついて読んだ。

たいへん収穫が多かった。先に書

評した「免疫学からみた消化管疾患」とともに最近もつと目的をいた出版である。

松橋 直教授の序文にあるようにこの本はわが国の第一線の研究者により、肝臓疾患を免疫学の立場からみたものである。内容はα-フェトプロテインと肝臓、慢性肝炎と自己免疫、肝硬変と免疫、原発性胆汁性肝硬変症、日本住血吸虫病と免疫、ルポイド肝炎、薬剤による肝障害、肝疾患における免疫グロブリン、卵黄感作による実験的肝硬変症、肝炎の免疫抑制療法、肝臓と補体の11篇のたいへん魅力のあるテーマからなっ

ている。また、いずれもテーマに立派に答えた力作である。

こうして項目をならべてみると、最近とくにクローズアップされている肝臓疾患にたいする免疫学的アプローチがどのような現状にあるのか読者につたえようとした目的の本であることが理解できよう。項目をみただけでも食指がうごくだろう。またすこし意欲のある学生なら求めてきて読むだろうと思う。

いずれの論文も文章は平易であるし、なによりも編集者の企図にそっているのが有難い。そして文献の引用もていねいなが、この本を出発点としてさらに深く勉強しようと思う人に助かる。

肝硬変と免疫、PBC、薬剤性肝障害はとくに面白く読めた。また肝疾患と免疫グロブリン、肝炎の免疫療法などきわめて実地的で明日からの肝疾患診療の糧になるであろう。

A 5 頁226 図47 写真33 1974

¥4,700 ㊦200 医学書院刊